

第 158 回定例（現地）研究会開催

「江戸野菜：小松菜に学ぶ地産地消」

—小松菜栽培を営む真利子伊知郎氏と大場常則氏を訪ねて—

農業には「強い農業・攻めの農業」だけではない様々な形があります。7月の総会では条件不利地域である離島で、地域の協働力で頑張っている愛媛の釣島集落の皆さんの話をうかがいましたが、日本には条件不利地域と言われている農業・農村でも元気で頑張っている姿がいたるところで見受けられます。

都市農業も見方によっては条件不利地域かもしれません。狭小な農地で規模拡大はままならず、都市的圧力によって農業を続けていくことが難しいといった悩みを抱えている農家も少なくないのでと推測されますが、このような大都会の中でも、風土を活かし、江戸野菜の伝統を守り続け、果敢に挑戦している農家があります。今回は、首都東京の「小松菜」を対象に、その代表である江戸川区の農家を訪ね、お話をうかがいました。



【現地研究会スケジュール】

(10:30～12:30) 真利子伊知郎氏宅

「小松菜力を発信する」 出口幸太郎氏 江戸川区産業振興課農産係長

「小松菜の産地戦略・人づくり・産地づくり」真利子伊知郎氏 東京農業者クラブ会長

(13:00～14:00) 昼食 長寿庵

(14:10～15:00)

「小松菜を中心とした農業経営者とその継承」大場常則氏 オオバファーム農場主

【出口幸太郎氏；江戸川区産業振興課農産係長】

「小松菜」の由来は八代将軍吉宗が鷹狩の折食した故事に由来し、その地名の小松川から名付けたとされています。このように小松菜は物語性に富み、地域ブランドとしてのアドバンテージがあるので、区としても大いに力を入れています。江戸川区では現在 273 地区、約 37 ヘクタールが生産緑地に指定され、区が借り上げて運営している区民農園が 34 カ所、その他に農家運営と企業運営の区民農園がそれぞれ 1 カ所、計 2 カ所あるそうです。

江戸川区では、「小松菜力」というガイドブックを創り、小松菜関連商品や店舗を紹介しています。最新のガイドブックには 97 種類の小松菜関連商品と 59 件の店舗が紹介されています。また、小



出口氏

松菜は硝酸対窒素が比較的多いため、生で食するには向いていないとされてきましたが、弘前大と協力してサラダにも向く小松菜を開発、あるいは鉄分やカルシウムが多いという特徴を活かして小松菜クッキーを作るなど、品種改良や商品開発にも積極的に取り組んでいます。

【真利子伊知郎氏；小松菜栽培農家・東京農業者クラブ会長】

真利子氏は45アール（うち施設ハウス栽培30アール）を経営する農家です。もとはサラリーマンをやっておられましたが、父の死を契機に、後を継ぐ形で農業を営むようになりました。本音では農業を継ぐ気は全くなかったそうですが、自分で作ったものがすぐ対価となって表れることへの驚きと喜びを味わってから本気で農業に取り組むようになったそうです。また、以前は市場出荷だけでしたが、江戸川区の小松菜はブランド力があるがゆえに、料亭などの特定の顧客が多く、近隣の人たちが地元の野菜を食べる機会がほとんどないという声を聞き、自宅の庭先に直売所を設けて近所の人たちも簡単に手に入るようにしたそうです。昔は都会で農業やることへの周辺住民からの反発、例えば宅地として農地を何故手放さないとか、土ぼこりが迷惑だとか、といった声が少なからずあったようですが、今では緑地空間の大切や食料を生産することの大切などが理解されるようになってきたそうです。

子供たちには農業後継者を強要する気はないということですが、息子さんは農業系の大学に行っているとのことで、何も言わなくても後継者になる気はあるのかもしれないとのことでした。



真利子伊知郎氏



現地研究会（真利子氏宅）

【大場常則氏；オオバファーム農場主】

非常に珍しい字の大場（おおば）氏は、苗字検索サイトで調べると全国で110人しかいないそうです。ご本人の話では神社に由来している苗字だそうで、大場家27代目といますから、かなり古い家柄のようです。いつごろからかははっきりしないそうですが、江戸から現在の埼玉南部までかなり広い範囲にわたって農地を持っていたようで、現在でも今の自宅周辺の農地以外に、埼玉県三郷市にも農地を持っているそうです。現在保有している自宅近辺の農地は約30アールで、そのほかに三郷市内に約13アールの農地を持っています。

自宅前には小松菜をはじめ、トマトやホウレンソウなどの自動販売機が置かれ、販売は年末年始以外は通年で、午前8時30分から売れきれのまでとなっています。自動販売機に入れる野菜は袋詰めが必要で、結構労力がかかります。息子さんが後継ぎとして農業を始め、今年で2年目になります。若手の農業者の交流の場として江戸川区の農業経営者青年会があり、30代40代が主ですが、農業技術や販売のことなど意見を交換し合っているそうです。面白いことに、情報を変に隠し持つようなことはせず、結構あけすけに情報交換をし、結果、よりいい野菜を作る農家が出たとしても、自分はさらにいいものを作るために頑張るといような関係が成り立っているといっています。オオバファームのある江戸川区一

之江は JR 線からかなり離れており、都営新宿線が開通するまでは、東京でありながら陸の孤島のようなところであったので、農地が残りやすい立地条件であったのかもしれないといえます。加えて、何代も続いた江戸野菜の文化を絶やすわけにはいかないという強い思いもあるようです。それでも、バブルがはじける前までは住宅化の波に晒され、都市的な圧力は少なくなかったそうですが、地域住民の農地に対する考え方が大きく変化してきており、最近ではそのような話は殆どなくなっているようです。



大場常則氏と後継者のご長男



オオバファームハウス

【長寿庵】

江戸小松菜を練り込んだそばやうどんが食べられる、大場ファーム近くの長寿庵で昼食をとりました。うどんは小松菜の粉末粉が 6 割、そばは 4 割練り込んでいるそうです。小松菜の量が多いうどんは黄緑色をしています。そばは小松菜粉の量が少ないのと、そばの色が強いので、はっきりした小松菜色にはなりません。食すると、わずかですが小松菜の香りがするようです（気のせい？）。



小松菜うどん



長寿庵

世界の都市農業事情

都市農業は、都市の緑化、環境保全という観点だけではなく、食糧生産の場としても非常に重要であるという位置づけが世界的には広まっています。国際連合食糧農業機構（FAO）によれば、都市内の農業生産量は、世界の食糧の 15～20 パーセントを占めています。

有名なのはロシアの自給菜園「ダーチャ」で、ロシア全食料の 30%はダーチャ生産されているといわれています。ロシア国家統計局 2008 年の統計によると、世界三位を誇るジャガイモの 83%はダーチャ

で生産されたもので、野菜は 70%、牛乳 51%、肉類 43%、卵 24%がダーチャで生産されています。

アメリカでも、都市で農産物を自給しようという動きが盛んになってきています。米国農務省は、都市内農家の人数は調査していないものの、都市農業事業を支援するため、教育やインフラ整備の基金計画を実施しています。そしてこのような計画への需要は年々高くなっていることから見ても、アメリカでは都市農業が急成長していることは間違いないようです。面積あたりの都市農業販売額は一般的な農家の 13 倍にもなるそうで、古い統計ですが、1991 年時点では都市的地域には 200 万戸農場があり、総生産販売額では 35%を占めています。おそらく現在はさらに大きく伸びているだろうと思われます。

世界的には、都市農業の特色として、1) 集約的な農業により、一般的な農業と比較して単位面積あたりに 3 倍から 15 倍もの高生産性をあげている。2) 長距離輸送に不向きで鮮度が要求される野菜や果樹などが生産されている。3) 都市の未利用有機物資源を活用した生産（有機農業）が行われているケースが多く、とくに発展途上国では、有機物の地域内でのリサイクルによって都市環境が改善され、衛生施設等の維持費の軽減や住民の健康状態の向上等都市運営費の節減に大きく寄与している。4) 専業農家だけでなく、多くの住民による自給が行われ、それらが都市住民の家計を大きく助け、GNPでは換算されない「真の豊かさ」を産み出している。5) 都市における大きな雇用創出の場として貢献している。といったようなことがあげられるのではないのでしょうか。

しかし、日本では「食料生産」よりも、ドイツのクラインガルテンに代表されるような、アメニティ空間やレクリエーションの場として捉えられることが多いようです。もちろんこのような環境資源としての位置づけは重要ですが、一方で食糧生産の場でもあるという観点も忘れてはいけないような気がします。そのような中で、江戸川区の小松菜農家は、「食料生産」の色合いが非常に濃いという印象があります。観光農園、市民農園が多い練馬などと比べるとその特色ははっきり見えてきます。小松菜という伝統江戸野菜を中心に営まれている江戸川区の農業は、地産地消を通じて地域住民ともつながり、アメニティはもちろん、しっかりと食も提供していると強く感じました。

寄付と会費納入のお願い

山崎記念農業賞基金の寄付募集

山崎記念農業賞は、会員の皆様からの寄付からなる基金で運営しています。昨年度は 26 万円ほどの寄付をしていただきました。さらに 7 月の総会后、13 名の方から 69000 円の寄付をお寄せいただきました。ただ、基金残金は十分な状況ではありません。山崎記念農業賞の主な支出は、授賞対象者調査費（主に交通費）、受賞者の旅費交通費（2 名程度）と表彰楯製作費です。

大変心苦しい限りですが、どうぞ山崎記念農業賞の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

会費納入のお願い

山崎農業研究所は、会員の会費や寄付で財政のほとんどを賅っています。会費納入率が昨年度は 83%でまだ十分とは言えない状況にあり、研究所の運営に支障をきたす要因となっています。まだ会費を納められていない会員におかれましては、是非会費納入にご協力くださるようお願いいたします。

入金先； 郵便貯金 山崎農業研究所 口座番号 10130-79304751

みずほ銀行 普通預金 山崎農業研究所 四谷支店 (036) 口座番号 8043304

問い合わせ、連絡先

E:mail yahiro_mas@hb.tp1.jp (事務局；益永個人メールアドレス)

E:mail yamazaki@yamazaki-i.org (事務局共通メールアドレス)